

原 著

養護を要する乳幼児の支援についての一提言

—セルフ・エスティームの回復および育成に基づく援助方法を考察する—

Proposal on methods of recovery and raising the self-esteem of infants who require custodial care

野 村 和 樹

要約：要保護児童の福祉増進のための基礎資料を得ることを目的として、平成15年に実施された厚生労働省雇用均等・児童家庭局家庭福祉課による児童養護施設入所児童等調査が実施された。その結果をもとにして、父母による非道処遇や環境上養護を必要とする児童が、その多くは3歳未満に入所し、平均4.4年の所在期間で退所していくことがうかがい知れる。それらの実態をふまえた上で、入所児童のセルフ・エスティームは低いと推測されることより、本論ではセルフ・エスティームを一つの尺度として乳幼児への支援を考察した。その支援としては、入所児童を受容することからはじまるのである。受容されることで、エリクソンの言うところの“自分は生きていく価値のある人間である”と肯定的なセルフ・エスティームを育むことにつながると考える。

Key Words：セルフ・エスティーム、習慣的低位自己評価、児童養護施設、支援方法

1. はじめに

社会的養護については、子どもの権利擁護を基本とし、保護者をはじめ、公的機関である国、地方公共団体、および関係団体などの関係する主体が、それぞれの責任を適切に果たしていくことが必要である。

また、社会的養護の役割は、子どもの健やかな成長・発達を目指すものである。保護に留まることなく、施設への入所などを通じて、心の傷を抱えた子どもなどに必要な心身のケアや治

療を行い、成長・発達を支援することにある。

本論においては、エリクソンの言うところの基本的信頼を獲得すべき年齢である、3歳未満にして既に父母による非道処遇や環境上養護を必要としている児童について、セルフ・エスティームを一つの尺度として考察を進め、その支援方法を探ることとする。

2. 児童養護施設入所児童の現状

児童養護施設は児童福祉法第41条において謳われているように、保護者のない児童、虐待されている児童その他環境上養護を要する児童を入所させて、これを養護し、あわせて退所した

Kazuki Nomura
大阪河 リハビリテーション大学
リハビリテーション学部
E-mail : nomurak@kawasakigakuen.ac.jp

者に対する相談その他の自立のための援助を行うことを目的とする施設である。したがって、養護を要する児童が措置され、入所している施設である。なお、児童養護施設入所児童に関わる資料全国的な資料は少なく、本論においては厚生労働省雇用均等・児童家庭局により公表された「児童養護施設入所児童等調査結果の概要」（平成15年2月）による資料を参考に論を進める。

入所している児童の年齢は、児童福祉法が定める乳児を除く児童で1歳～18歳と幅広く年齢別入所児童数は表1の通りである¹⁾。

また、児童養護施設入所児童の入所理由は「父母の放任・怠だ」11.7%、「父母の就労」11.6%、「父母の虐待・酷使」11.1%、「父母の行方不明」11.0%、「父母の入院」7.0%等があげられ、「父母の死亡」により児童養護施設に入所してくる児童は3%に過ぎないのが現状である²⁾。

すなわち、児童養護施設に措置されてくる児童の多くは、虐待・酷使・放任・怠だ等の父母による非道処遇や環境上養護を必要と児童である。

入所時の年齢に目を向けると、0歳児及び1歳児は安定した生活環境の確保その他の理由により特に必要のある場合を除き、原則として乳児院に入所するので、児童養護施設入所児は少ないが、乳児院入所児と併せると表2のように、0歳児2516人、1歳児1546人、2歳児がもっとも多く6577人（21.6%）、次いで3歳児の3968人（13.0%）となる。乳児院ならびに児童養護施設入所児童は3歳児以下で入所している児童が3分の1を超えているのが現状である³⁾。

なお、児童の委託期間は表3⁴⁾に示されているように、平均で4.4年、大半の入所児童が4年未満で退所していくのであるが、その反面12年以上入所している児童も5%（1,530人）に上る。すなわち、現在児童養護施設に入所して

表1 現在児童養護施設に入所している年齢別児童数（平成14年）

	総数	男	女	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳
養護施設児	30,416 (人)	16,397	13,897	4	34	657	1,342	1,574	1,810	1,981	1,999	2,142
	100(%)	53.9	45.7	0.0	0.1	2.2	4.4	5.2	6.0	6.5	6.6	7.0
	9歳	10歳	11歳	12歳	13歳	14歳	15歳	16歳	17歳	18歳以上	平均年齢	
養護施設児	2,076	2,125	2,085	2,111	2,158	2,197	2,079	1,544	1,359	1,119	10.2歳	
	6.8	7.0	6.9	6.9	7.1	7.2	6.8	5.1	4.5	3.7		

注) 総数には、性別不詳、年齢不詳を含む。

表2 委託時または入所時の年齢別児童数（平成14年）

	総数	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	
養護施設児	30,416(人)	74	1,024	6,577	3,968	2,640	2,421	2,452	1,840	1,691	
	100.0(%)	0.2	3.4	21.6	13.0	8.7	8.0	8.1	6.0	5.6	
乳児院児	3,023(人)	2,442	522	49	4	2	1	平均			
	100.0(%)	80.8	17.3	1.6	0.1	0.1	0.0	0.2歳			
	9歳	10歳	11歳	12歳	13歳	14歳	15歳	16歳	17歳	18歳以上	平均
養護施設児	1,520	1,347	1,160	1,170	1,015	786	472	137	62	9	5.9歳
	5.0	4.4	3.8	3.8	3.3	2.6	1.6	0.5	0.2	0.0	

注) 総数には、年齢不詳を含む。

表3 委託期間又は在所期間別児童数（平成14年）

	総数	1年未満	1年以上 －2年未満	2年以上 －3年未満	3年以上 －4年未満	4年以上 －5年未満	5年以上 －6年未満	
養護	30,416(人)	5,593	4,791	3,866	3,165	2,536	2,076	
施設児	100.0(%)	18.4	15.8	12.7	10.4	8.3	6.8	

	6年以上 －7年未満	7年以上 －8年未満	8年以上 －9年未満	9年以上 －10年未満	10年以上 －11年未満	11年以上 －12年未満	12年以上	平均期間
養護	1,706	1,387	1,146	996	888	707	1,530	4.4年
施設児	5.6	4.6	3.8	3.3	2.9	2.3	5.0	

注) 総数には、期間不詳を含む。

いる児童の年齢、16歳1544人、17歳1359人、18歳以上1119人を併せて考えると、入所後児童福祉法で定められている措置期間が切れるまで退所できない児童が少なくないことがうかがわれる。

今日、児童養護施設に入所している児童は、父母による非道処遇や環境上養護を必要とする児童が、その多くは3歳未満に入所し、平均4.4年の所在期間で退所して行くのであるが、一方では措置期間が切れるまで退所できずに施設で過ごす児童も少なくないと言うのが現状である。

3. 児童養護施設入所児童のセルフ・エスティーム

3-1 セルフ・エスティームの構成

3歳未満にして既に父母による非道処遇や環境上養護を必要としている児童とは、成長発達にどのような影響を受けているのであろうか。セルフ・エスティームを一つの尺度として、考察を進めたい。そこで、セルフ・エスティームの構成をまず明らかにする。

セルフ・エスティームの構成を伊藤忠弘による社会心理学における自尊感情 (self-esteem) と自己評価 (self-evaluation; self-appraisal) の定義⁶⁾ならびに精神分析の立場としてサリヴァンによるセルフ・エスティーム⁷⁾を中心に池田

寛⁸⁾、梶田叡一⁹⁾らの説を併せてセルフ・エスティームの構成を考える。

図1に見られるようにサリヴァンは自己評価を正確な見解、自己に対する敬意を含んだ肯定的な見解としている。一方、伊藤は肯定的な感情、価値ある存在として捉える感覚としている。サリヴァンは評価の対象としているため見解であり、伊藤は自己に対する感情としているので、感情であり、感覚としている。伊藤は自分自身に向けられた感情も含めている。また、伊藤は自己評価をさまざまな領域における自分に対する認知的評価とし、その評価は領域ごとに異なるとしている。

また、梶田によると自尊感情は自分自身を基本的に価値あるものとする内的な感覚である。基本的態度や行動を支え、大きく影響を与えている。そして、自己評価は自尊感情を測定する概念であるとしている。すなわち、自尊感情は自分自身を“どういう者であるか”と考えるかによって、基本的な様相が異なるとしている。池田は包み込まれ感覚 (受容的感覚) を自尊感情の基礎として、自分自身のふさわしさや相対的な有能さについての総合的な感覚を自尊感情としている。構成要素として、身近な人による受容感覚・自己表現に対する自信・勤勉性感覚・自己受容の感覚あるいは自己信頼の4要素をあげている。

以上のようにサリヴァン、自己評価を見解と

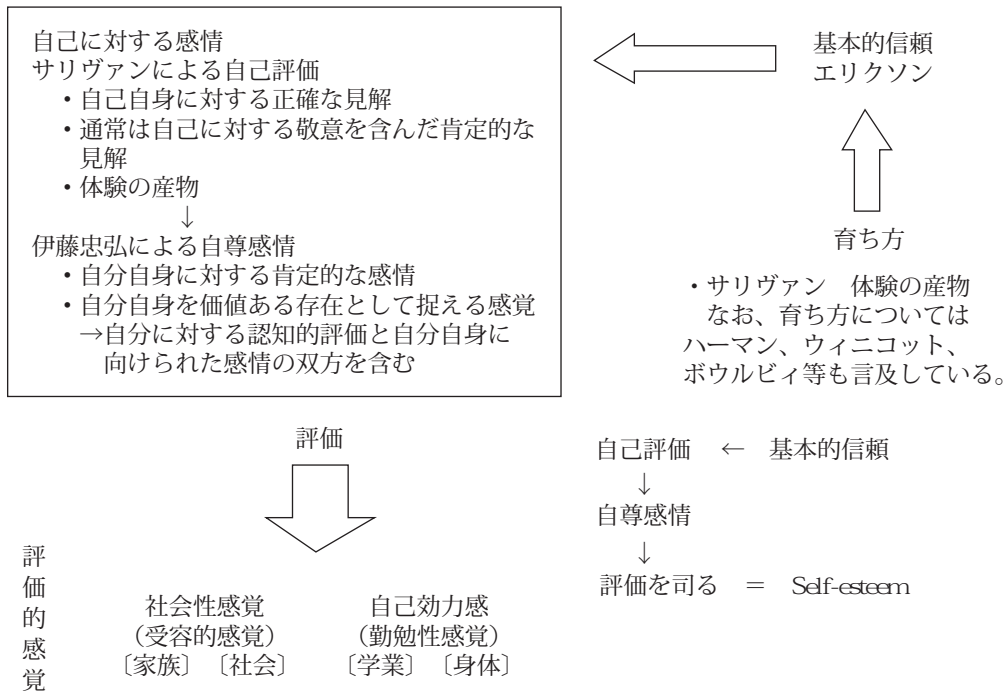


図1 セルフ・エスティームの構成

しており、梶田は自己評価を自尊感情の測定概念としている。伊藤、池田は自尊感情を自己に対する感覚としている。これらをふまえ本論では、図1にあるように自己に対する見解、すなわち「自分自身をどういう者であるかと考える」この考え方を決定するものを自己評価として、「自分自身をどういう者であるか」という感情を自尊感情とする。自己評価と自尊感情をあわせてセルフ・エスティームとする。セルフ・エスティームが自己を評価したり、他者から自分に向けられ感情も判断し評価を下す要因となる。

3-2 習慣的低位自己評価

サリヴァンは習慣的低位自己評価をよい機会に恵まれなかった人、能力の限られた人の持つ正確な(判断による低い)評価ではなく、ある種の不幸な体験の産物によるとしている。

ハーマンは発達途上の子どもの肯定的な自己感覚はケアをしてくれる人が権力をおだやかに

使ってくれるから生まれるとして、親が子どもよりもはるかに強力であるのに子どもの個人性と尊厳性とを尊重する姿勢を示してくれるからこそ、子どもは価値を与えられ尊敬されていると思い、自己評価 (self-esteem) が育まれるとしている。

子どもは非道処遇により基本的信頼の深刻な破壊と、恥辱感と罪悪感と劣等感が普遍的に存在することと、社会生活の中にあるかもしれない外傷の残りかすを避けるために、親密関係からの引きこもりを起すとしている。また、自分自身への信頼を失い、自分以外の人々への信頼を失い、神への信頼を失い、セルフ・エスティームは屈辱と罪悪感と孤立無援感という体験によって打撃を受け習慣的低位自己評価に貶められるとしている¹⁰⁾。

3-3 児童養護施設入所児童のセルフ・エスティーム

既に述べたように児童養護施設入所児童は、養育者からの非道処遇、環境上の問題等で、親元から離れて入所している。したがって、セルフ・エスティームが習慣的低位である児童が多いことが予想される。筆者はすでに高山らにより訳されたホープらのセルフ・エスティーム尺度¹¹⁾ およびDomino, G.D.が作成した各発達段階15項目の尺度の中から、下仲らが邦訳し信頼性を確認した各10項目のエリクソンの発達課題達成度尺度¹²⁾ を使い、「児童養護施設の入所児童は対象群に比較してセルフ・エスティームが低い」という仮説を立て、可能な限り生育歴、生活環境上の差をみるために、児童養護施設入所者の性別、学年、兄弟の構成と対応する対象児童を統制群より無作為に1人ずつ抽出し、セルフ・エスティーム尺度各領域及び発達段階課題達成基本的信頼について各々差の検定を行った¹³⁾。

その結果は表4に示したようにセルフ・エスティーム尺度の全般的尺度（1%水準）、セルフ・エスティーム尺度の学業尺度、身体尺度、家族尺度、発達段階課題達成度尺度の基本的信頼（それぞれ0.1%水準）で有意な差が認めら

れた。

施設入所児童は入所していない児童より、対人関係において何らかの負担を有し、セルフ・エスティームも低いと推測できる結果が認められた。

4 入所時期とセルフ・エスティームの関係

4-1 乳幼児の入所

エリクソンは母親から乳児は信頼感を植え付けられるとし、これが同一性の基礎を形づくるとしている。信頼感を得ることにより、自分は本来の自分であると感じ、「万事申し分なし」と感じ、他人が自分に対して期待しているような人間になるという意識を合わせ持ち、基本的信頼の獲得に至るとしている。

また、ボウルビィは愛着の発達を4段階に分け¹⁴⁾ 次のように示している。

- ① 第一段階 「人物弁別をとまなわない定位と発信」の段階（生後8週～12週まで）
- ② 第二段階 「一人（または数人）の弁別された人物に対する定位と発信」の段階

表4 入所施設を利用している対象群との比較

	平均値 (20点満点)		t 値	有意差
	統制群 (N=26)	施設利用群 (N=26)		
セルフ・エスティーム 全般的尺度	11.31	7.88	3.062	**
セルフ・エスティーム 学業尺度	10.08	5.35	5.959	***
セルフ・エスティーム 身体尺度	10.46	6.15	3.772	***
セルフ・エスティーム 家族尺度	13.15	8.69	3.815	***
セルフ・エスティーム 社会尺度	11.19	9.46	1.851	
発達段階課題達成 基本的信頼	11.73	8.08	3.662	***

P<0.05*, P<0.01**, P<0.001***

(12週から6ヵ月ころまで)

- ③ 第三段階 「発信ならびに動作の手段による弁別された人物への接近の維持」の段階(6ヵ月ころから2歳ころまで)
- ④ 第四段階 「目標修正的協調性の形成」の段階(生後2年の終わりころから始まる)

以上のようにエリクソンならびにボウルビイもともに、生後3年間あまりを重要な時期と位置づけている。つまり、この時期の非道処遇や環境的な問題は肯定的なセルフ・エスティームの育成を阻害ことに他ならないのである。

一方、乳児院ならびに児童養護施設入所する児童の入所時期に目をやると3歳児以下で入所している児童が全入所児童の3分の1を超えている現実がある。

すなわち、本来なら基本的信頼を獲得し、愛着が発達する時期、肯定的なセルフ・エスティームが育成される時期に非道処遇や環境的な問題で健やかに生育できていない乳幼児が入所していることは想像するに難くない状況である。したがって、この年齢で入所する乳幼児については、基本的信頼の獲得、愛着の発達に気を配り支援する必要がある。

4-2 問題の発見

児童福祉において、非道処遇や環境的な問題は発見され難いものである。発見されるのはそれが身体に負った傷が発見され、児童虐待として取り上げられた時や、逸脱行為等により具現化されたときである。したがって、入所年齢が高いからと言って、それまで健やかに育成されていたとは限らないのである。

児童福祉における現状の措置制度においてはまず「非道処遇や環境的な問題」等の発見ということになる。それが発見された時点より福祉サービスを受けることになるのである。また、児童福祉法には年齢の制限つまり、18歳という

上限がある。「非道処遇や環境的な問題」等の問題が発見されない児童は何ら支援を受けられないまま児童福祉法に基づく措置期間を終えてしまうのである。

5 要養護児童の支援についての提言

要養護児童の支援については、まず如何に養護を必要としている児童を発見するかである。児童虐待については、「児童虐待の防止等に関する法律」の施行により、通報義務が課せられることもあり通報件数は増加の一途をたどっているが、その一方で虐待による死亡事例も後を絶たないのが現状である。

また、児童の逸脱行為を見過ごさないで発見することによって、問題を発見する必要がある。そのためには児童に接する大人が良き支援者である必要がある。児童が家庭以外で過ごす大半は保育所であったり、幼稚園、学校である。保育士、教師が良き支援者であることは言うまでもないことであるが、保育所、幼稚園、学校が養護を必要としている児童の安全地帯であるためには、スクールソーシャルワーカーが担う役割も大きく、配属される学校が増えることが待たれるところである。

セルフ・エスティームが評価を司ると考え、それは育ち方により育まれるものであると考え。すなわち、エリクソンの言うところの基本的信頼、ボウルビイの愛着、ウィニコットの自我関係性に起因する。

養護された児童の支援については、問題が発見された年齢だけで、判断するのではなく、生育歴等を十分に配慮したうえで、肯定的なセルフ・エスティームを育めるよう、エリクソンの言うところの基本的信頼の獲得、ボウルビイの愛着の発達等に留意した支援計画を立案し支援にあたる必要がある。

その一例として、児童が自己受容できるよう

支援することがあげられる。ロジャース¹⁵⁾によれば、自己受容とは要養護児童が次のようになっていくことを意味するのである。

- ① 自分自身を非難すべきものとしてではなく、価値のある、尊敬に値する人間であるとみるようになる。
- ② 自分の標準が、他人の態度や願望にもとづくものではなく、自分自身の経験にもとづくものであるとみるようになる。
- ③ 基本的な感覚的素材 (basic sensory data) を歪曲することなしに、彼自身の感情、動機、社会的・個人的経験をそのままにみることができるようになる。

すなわち、自己自身に対する正確な見解、自己に対する敬意を含んだ肯定的な見解を持てるように支援をすることが、乳幼児の成長発達を促すことにつながる。その第一歩として、乳幼児を受容することからはじまるのである。受容することで、エリクソンの言うところの“自分は生きていく価値のある人間である”と肯定的なセルフ・エスティームを育てることになり、基本的信頼の獲得へとつながっていくのである。

〔参考文献〕

- 1) 厚生労働省統計表データベースシステム 平成14年度 児童養護施設入所児童等調査 現在の年齢別児童数
<http://www.dbtk.mhlw.go.jp/toukei/kouhyo/data-kou25/data14/h14nyusho1.xls>
(2008年8月20日現在)
- 2) 厚生労働省統計表データベースシステム 平成14年度 児童養護施設入所児童等調査 養護問題発牛理由別児童数
<http://www.dbtk.mhlw.go.jp/toukei/kouhyo/data-kou25/data14/h14nyusho11.xls>
(2008年8月20日現在)
- 3) 厚生労働省統計表データベースシステム 平成14年度 児童養護施設入所児童等調査 委託時または入所時の年齢別児童数
<http://www.dbtk.mhlw.go.jp/toukei/kouhyo/data-kou25/data14/h14nyusho2.xls>
(2008年8月20日現在)
- 4) 厚生労働省統計表データベースシステム 平成14年度 児童養護施設入所児童等調査 委託期間又は在所期間別児童数
<http://www.dbtk.mhlw.go.jp/toukei/kouhyo/data-kou25/data14/h14nyusho3.xls>
(2008年8月20日現在)
- 5) 伊藤忠弘、2002「自尊感情と自己評価」船津衛、安藤清志編著『自我・自己の社会心理学』北樹出版 p96.
- 6) サリヴァン, H.S, 1990年、『精神医学は対人関係論である』, 中井久夫ら訳, みすず書房.
- 7) 池田 寛 2000年、『学力と自己概念—人権教育・解放教育の新たなパラダイム』, 解放出版社.
- 8) 梶田叡一編 1987年、『自己認識 自己概念の教育』, ミネルヴァ書房 梶田叡一1988年、『自己意識の心理学』, 東京大学出版会
- 9) ハーマン, J.L. 1999年、『心的外傷と回復』, 中井久夫訳, みすず書房.
- 10) A.W. ホープら共著1992年、『自尊心の発達と認知行動療法』, 高山巖監訳, 岩崎学術出版, p207-12.
- 11) 下仲順子ら2000年「E. エリクソンの発達課題達成尺度の検討」『心理臨床学研究』, 17-6, p525-535.
- 12) 野村和樹 2003年「児童におけるセルフ・エスティームと発達段階の関係」『大阪ソーシャルサービス研究』, 第5号: 27-48.
- 13) ボウルビィ, j 1967年『母子関係の理論 愛着行動』黒田実郎ほか訳, 岩崎学術出版社.
- 14) ロジャーズ, 1967『ロジャーズ全集 8巻 パースナリティ理論』伊藤博 監訳, 岩崎学術出版社.